

## オタクサについて

土肥原 弘久

先ごろ長崎市で行われた長崎歴史文化観光検定の公式テキストブックには、シーボルトゆかりの花として「カノコユリ」と「ツバキ」が取り上げられていた。「カノコユリ」は、シーボルトがオランダに持ち帰ったことより、ヨーロッパのユリ栽培ブームのきっかけになり、「ツバキ」は、その美しい姿を「冬のバラ」として讃えられている。

シーボルトに縁の深い花と言え、これらに加えて「あじさい」が有名である。近年では品種改良された西洋アジサイが多く見られるが、もともとは日本で自生する梅雨季の植物であり、長崎の人達には、「オタクサ」のよび名のほうが親しみを持たれているかもしれない。

シーボルトが長崎で出会って愛した女性「お滝さん」にちなんで「あじさい」を「オタクサ」と名づけたと言われている。その由来について、長崎学の創始者として著名な古賀十二郎が著書「丸山遊女と唐紅毛人」の中で次のように述べられている。

「シーボルトは、遊女其扇の<sup>そのま</sup>実名タキに対してOaksasと云ふ名称を用ひてゐる。Oaksasが「お滝さん」の発音の約まれるものである事は多言する迄もない。シーボルトは、自己の最も愛するお滝さんの名を用ひて、紫陽花の一種にHydrangea Oaksasと云ふ学名をつけた。シーボルト再渡



シーボルトほか著「日本植物誌」より  
シーボルト記念館蔵

来後、シーボルトよりお滝さんやお稲さん宛書翰には、最早Sonogisと云ふ名称は一切用ひられず、悉くOaksasまたはOaksanとのみ記してある。そしてお滝さんよりシーボルト宛書翰(蘭文、

三瀬周三代筆。)には、Otake Otakeisan Otakeisanなどがある。」  
また、呉秀三医学博士の名著『シーボルト先生その生涯及び功業』(大正15年)にも「お滝をシーボルト先生は常にオタクサOtakeasと呼び」と記載されている。

あじさいは「お滝さん花」と呼ばれ市民になじみの深い花として昭和43年長崎市の市花とされている。ただ、この「オタクサ」の名称が、長崎で、いつ頃から一般に知られるようになったのかはよく解らない。

ところで、呉秀三博士は、『シーボルト先生その生涯及び功業』の執筆にあたり再三来崎されている。その時の逸話を「呉秀三先生生誕百年記念会誌」(同記念会発行 昭和40年)の中に見つけることができた。先生の生誕百年を記念して催された座談会「呉秀三先生と日本精神医学」の記録に記載されている。その座談会で、長崎大学名誉教授北村精一先生が「シーボルト研究者としての(呉)先生」について語っておられる一節があり、次のように述べられている。

「当時、長崎には有名な歴史家がおりましたことに永山時英という方は県立図書館長でずいぶんいい仕事しておられます。また長崎高商の教授で武藤長蔵という、今でもシーボルトに関しては武藤文庫というりっぱなものが長崎大学の経済学部に残っております。それに郷土歴史家として古賀十二郎という人がおった。この人は非常な語学の天才で、六、七カ国語が読めた人です。正式な学問をした人ではありませんが、博覧強記といえますか、よくいろんなことを知っておられた。それでこういう方々から多方面の資料を集めるべく先生が眼をおつけになったことは確かです。」

そこで先生の逸話を申し上げますが、これは古賀十二郎さんの弟子である渡辺庫輔という人 この人はつい二、三年前に病気で亡くなりまし

### 風信

○五月、長崎周囲の山々が楠若葉で一番美しくなる季節であり、五月晴のもと「初のぼりここにも日本男子あり」と、何か爽やかさを風に感じる。

○そして、私はこの季節長崎の「唐あく・ちまき」がすきである。「唐あく・ちまき」は我が国では沖繩・鹿児島・宮崎・長崎でしか食べられないのかもしれないと言う。

○五月「男の節句」と言えば屋根の軒に「菖蒲とふつの葉」を結んで搓っていたが、今はあまりみかけない。然し長崎港内での「ペーロン大会」は今でも盛んなようであるが、ペーロン船の型も銅鑼の響も昔とはどこか変わったように思える、時代の流れでしょうねと友人は言う。

○戦前の男の節句の料理には干鰯に昆布を入れた煮付がありました。今は殆んど見かけませんねと私の知人が話しかけてこられた。「食生活も時代と共に変わるものですかね」とお答えしておいた。

○先月より、毎週月曜日の午前中、本会で開催している「長崎学講座」の講師に、女性講師を主にお願したところ「毎回満席になりますよ」と事務局より報告あり。どうしてだろうかと考えている。

○六月一日は「長崎くんち小屋入り」の日である。今年は七年ぶりに本会の事務所がある桶屋町が、踊奉納町に当たっている。「長崎くんち行事」には参加せねばならぬが、六月一日の小屋入りの服装は夏衣装である。小生、冬の袴は持っているのですが、夏袴は持たないのです。さてどうしたものかと考えている。

○先日、京都野村美術館の谷晃学芸部長より「茶の湯の文化」をいただいた。全編を、第一章お茶の種類と効能、第二章日本文化と茶の湯など、六章に分けて記してあったが、その主軸は、第六章・茶の「美のカタチ」であり、そこには茶室、絵画、やぎもの、工芸、料理と実に詳しく述べてあった。私は「茶道を志す人」座右に是非おかる可き書物だと思ひ読ませて戴いた。

(淡交社刊 一、六八〇円(税込))

6月には、グラバー園や出島、シーボルト宅跡などを会場にして開催される「長崎あじさいまつり」に合せて、『シーボルトとオタクサ展』ヨーロッパに紹介されたアジサイ』を行ってゐる。記念館に隣接する国指定史跡「シーボルト宅跡」には三百株のあじさいが植えられており、「長崎あじさいまつり」の期間中は、さらに多くの鉢植えも並べられ見事な彩りとなる。

ぜひ、鳴滝にお運びいただきたい。と考えている。

(シーボルト記念館長)

長崎歴史文化協会 研究室

TEL 八二二一 一五四〇

十八銀行公会堂前出張所 二F

